

## 公民館の催し

問い合わせ 公民館 ☎35-0700/FAX31-4998(〒659-0068 業平町8-24)

### 芦屋川カレッジ(高齢者大学) 第24期生募集

日程 5月9日～平成20年3月12日(毎週水曜日) 会場 市民センター401室ほか  
 内容 <必修コース36回>午前10時～11時30分(全員受講)/<選択コース15回>午後1時15分～2時45分(3週間に1回)「ひと・まち・あしや」コース...芦屋の文化、元気を発掘「視点・みらいコース」コース...未来の環境・社会・国際問題 定員 110人(各55人)  
 対象 市内在住で、満60歳以上の初めて受講するかた 受講料 年間15,000円  
**【芦屋川カレッジ聴講生の募集】** 選択コースは1コースのみに応募いただけます。  
 対象 芦屋川カレッジの修了生のかた 定員 各55人 受講料 年間2,800円  
 申し込み はがきかファクスで、希望事業・コース名 住所 氏名 電話番号 性別 第2希望があればその旨 生年月日 芦屋川カレッジ修了生のかたは修了期を明記し、3月31日(土)<消印有効>までに公民館へ。応募者多数の場合は抽選(市内在住優先)、定員に満たない場合は、引き続き先着順で受け付け。決定者には、はがきで詳細を連絡。

### 芦屋川セカンド・カレッジ

日程 <Aコース・全10回>5月21日～平成20年3月17日(第3月曜日) <Bコース・全10回>5月10日～平成20年3月13日(第2木曜日)、いずれも午前10時～11時30分 会場 市民センター401室 内容 誰もが知っている? - 紙幣に描かれた日本人「神宮皇后 - 日本初の肖像紙幣は女性だった」堺女子短期大学学長・塚口義信氏 / 「紫式部 - 平安文学の舞台裏を探る」同志社女子大学特別任用教授・藤谷寿氏ほか インドがもたらした宝物 インドが世界にもたらした諸価値 龍谷大学教授・長崎嶋子氏 / 「インドのイスラム文化: ヨーロッパとアジアの架け橋」大阪大学教授・山根聡氏ほか 定員 芦屋川カレッジの修了生・A B各100人、市民・A B各10人(いずれも1コースのみに限る) 受講料 年間3,100円 申し込み はがきかファクスで、希望事業・コース名 住所 氏名 電話番号 第2希望があればその旨 芦屋川カレッジ修了生のかたは修了期を明記し、3月31日(土)<消印有効>までに公民館へ。応募者多数の場合は抽選(市内在住優先)、定員に満たない場合は、引き続き先着受け付け。決定者には、はがきで詳細を連絡します。

### 文化セミナー「秘境一筋 極上人生」

日時 3月24日(土)午前10時～11時50分 会場 市民センター401室 内容 講演「秘境一筋 極上人生」探検家・藤木高嶺氏(公民館講座から生まれた山歩きグループの活動紹介と講演) 定員 先着120人 申し込み 直接会場へ

### 楽しい人形劇と影絵

日時 3月29日(木)午前10時～11時30分 会場 市民センター音楽室 内容 影絵劇「影あそび」「にげだしたパンケーキ」、糸あやつり人形劇「人形ボードビル」ほか 出演 人形劇団「六」ほか 対象 幼児と小学生低学年(保護者同伴可) 定員 先着100人 申し込み 直接会場へ

## 谷崎潤一郎記念館の催し

問い合わせ 谷崎潤一郎記念館 ☎23-5852/FAX38-3244(伊勢町12-15)  
 メール ashiya-tanizakikan@rhythm.ocn.ne.jp

### 【文学館講座特別企画】新緑の薬師寺「心のふるさとを訪ねる」

日時 4月10日(火)午前9時30分2～午後5時30分(帰着予定) 集合 JR芦屋駅南口付近 内容 新緑の奈良・薬師寺をバスで訪ね、生駒基達師に講話や薬師寺の由来・伝統のお話を聞きながらの寺巡り、また本山での写経体験など。昼食は名舗「萬京」 参加費14,000円 定員 先着22人 申し込み 電話・ファクス・メールで上記へ

### 【文学館講座】短歌講座/ "ほっこり"書で遊ぶ

日時 4月17日・5月15日・6月12日(火)午前10時30分～正午 4月22日・5月20日・6月17日(日)午前10時～正午 会場 谷崎潤一郎記念館 内容 初心者手ほどき・現代短歌鑑賞 実用的な書(色紙やカード作りなど) 講師 現代歌人協会会員・楠田立身氏 京都光華学園伝統文化科特別講師・石井みやび氏 受講料 とも1回3,000円(3回分前納・8,000円) 定員 各20人 申し込み 電話・ファクス・メールで上記へ

### 市制施行50周年記念写真集「芦屋のうつりかわり」を頒布

#### 写真でみる芦屋の歴史

市制施行50周年(平成2年11月10日)に発行した記念写真集「芦屋のうつりかわり」の在庫本を、行政情報コーナー(市役所北館1階)ラポルテ市民サービスコーナーで頒布しています。

「芦屋のうつりかわり」  
 21.6×30.5cm / 135頁 /  
 紙表紙・銀箔押し(ハードカバー)  
 頒布額 500円



会下山遺跡と触覚模型

問い合わせ 広報課 ☎38-2006

「広報あしや」バックナンバーは、市ホームページ『広報あしや ON LINE』でご覧いただけます。



文・三好美佐子さん  
 絵・竹本 温子さん

今から七百年ほど、昔の話  
 あしやの村に、藤左衛門という、広い土地を持つ地主が住んでおった。  
 ある時、藤左衛門は重い病にかかり明日をも知れん体になって、子どもの月若丸に自分の土地を継がせることを決めた。  
 そこで月若丸のおじの藤栄を呼んで、「わしの命は短い。死んだら、土地を月若に譲るので月若を助けてもらいたい。」  
 そう言い残して、この世を去った。  
 ところが、藤栄は心よくない人で、月若丸を自分の家に引き取ったまではよかつたんやが、残された家や広い土地をみんな自分のものにしてしまつと、「じゃまもの」と、月若丸を家から追い出してしまった。

そのころ天下は、北条時頼という人が治めていた。  
 時頼は、考えるところがあつて、將軍という大事な位を子どもの時宗に譲り、名も改めて、お坊さんになった。  
 そして、諸國を旅することにした。  
 ちょうど、時頼が、坊さんに姿を変え、あしやにやつてきたのは、月若丸が藤栄から家を追い出されたところであつた。  
 日も暮れかかり、時頼は、一晩泊めてくれる家を浜辺で探した。  
 ふと見ると、塩焼きの小さい草ぶきの家があつた。表に立ち、声をかけた。  
 「すまぬが、一晩泊めてください。」  
 中から男が現れ、すぐに奥に入つたが、  
 「この家の主がこのようなあばらやでよければと、申しております。」  
 と、伝へて出てきた。言われて時頼は、小さな部屋に案内された。  
 板で囲つてあるだけの、粗末な部屋であつたが、きれいに掃き清めてあつた。  
 そこに、どことなく気品のある少年が静かに



座つておつた。  
 折しも、月の光が板のすき間から射し込み、寂しげな少年の横顔を照らしていた。  
 時頼は、何かあるに違いないと思ひ、案内の男に少年のことを聞いた。  
 「このかたは、何かご事情があらぬかのように見受けられるが、よければ、このわたしに聞かせてもらえぬか。」  
 坊さんに言われて、案内の男は、月若丸のことなど、藤栄のことなど、すつかり話した。  
 時頼は、その話に、驚き、怒り、月若丸に同情した。また、月若丸が、父から受け取つた土地の譲り渡し書を見せると、大きくうなずくのであつた。  
 よく日、時頼は海で舟遊びをしている藤栄を訪れた。  
 主の藤栄は、立派な衣服を身につけて、鉦や太鼓、笛に合わせて舟の中で舞を舞つておつた。

舞いが終わるのを待つて、坊さんは、「やあ、やあ。お見事、お見事。もう一さし舞ってください。」  
 と、大声で言つた。  
 その声に藤栄は、いやな顔をした。自分たちの楽しみをじゃまされたと思つたからであつた。「無礼者、何者か。」  
 坊さんは、そんな藤栄の言葉など、気にかける様子もなく、ゆうゆうとしておつた。それを見て、藤栄はますます腹を立て、赤い顔をして、「ここを立ち去れ。立ち去らねば、えらいめにあわせるぞ。」  
 その時、坊さんは、ゆつくりかぶつていた笠をとつた。そして、「よく聞け、藤栄。われこそは先の將軍、北条時頼なるぞ。わが顔を忘れたとは言わせぬぞ。」  
 このような飯の姿をしておるのも、おまえのような悪者の心得違いを糾すためじゃ。  
 おまえは、月若を追い出し、土地や家など自分の物としておる。そんなことが、許されると思ふか。」

り渡し書を高くかかげた。驚いた藤栄をはじめ、居合わせた人々は船の上で頭を垂れ、ひれ伏した。  
 時頼は、さらに藤栄に言つた。  
 「おまえのごとき悪者は、厳しく罰せねばなるまい。しかし、心から悪かつたと思ひ、月若のために尽くすのであれば、許してやらぬこともない。月若にすべての土地を返し、月若の家が栄えるよう励めよ。」  
 時頼は、しばらくあしやに留まり、藤栄が心を入れ替え、深く詫言る様子を見定め、あしやの土地を離れた。  
 月若丸は、時頼に厚く礼を言い、心を入れ替えたおじの藤栄に助けをもらい、家を栄えさせたという。  
 この月若丸の話は、今も月若町や、月若公園、月若橋などの名前で、残されている。  
 「あしやの民話」は、芦屋に語り伝えられていたお話を、三好美佐子先生をはじめ、民話を研究するグループの皆さんが収集整理して、やさしく民話の形に整えられ、平成十一年に発行されたものです。